

## 【研究B】

タイトル：緩和ケアにおける薬剤師の副作用への介入

### ◇研究目的と意義：

がんの痛みや症状管理など緩和医療を提供することを目的に「日本緩和医療薬学会」が2007年に設立され、緩和薬物療法認定薬剤師制度も発足し、その認定数は年々増加して、現在全国で759名（2021年現在）の緩和薬物療法認定薬剤師（以下、認定薬剤師）が誕生している。一方、緩和医療における認定薬剤師の働きについてのアウトカム調査は実施されていないため、職能を活かした貢献ができていないか否かについて、明らかではない。認定薬剤師制度が開始し10年を経た今こそ、緩和ケアに携わる薬剤師の活動内容を調査し、問題点を提起するとともに、存在意義について明らかにする必要がある。そこで、本研究では、緩和ケアを実践している薬剤師（認定薬剤師および非認定薬剤師）の副作用への介入の状況とその転帰を詳細に調査し、客観的に解析することで、認定薬剤師の活動状況と意義を明らかにすることを目的とする。

### ◇方法

#### 1) 研究の種類・デザイン

前向き観察研究

#### 2) 対象

定められた研究実施期間(2カ月間)に緩和ケアの活動において、薬剤師が、新規に副作用の

介入を行った患者を前向きに登録する。

#### 3) 参加医療機関

日本緩和医療薬学会会員に対し、研究参加を公募する。

#### 4) 必要回答者数および必要症例数の設定

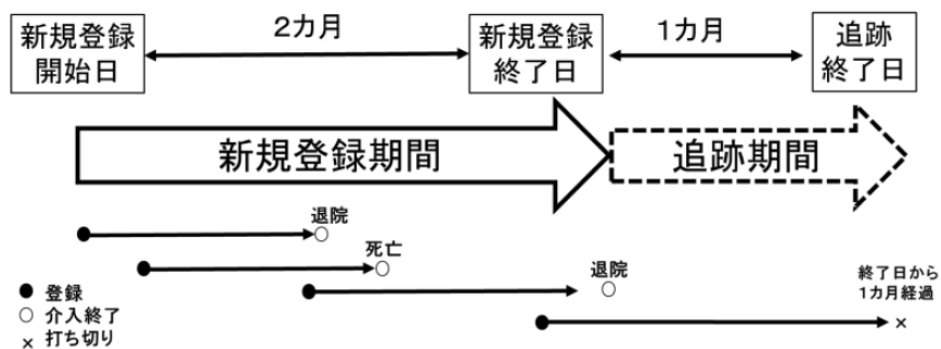
本研究は、副作用への薬剤師の介入に関するパイロット調査であり、対象数の設定についてのサンプルサイズ計算を必要とするような設定根拠はない。

#### 5) 研究方法

緩和ケアの活動において、薬剤師が、新規に副作用の介入を行った患者を前向きに登録する。登録時より、副作用情報シート（Googleフォーム）を用いて、ベースラインデータは、診療記録から転記し、副作用への介入について記録する。

記録のタイミングは、薬剤師が副作用への介入を開始した日から、介入終了日まで記録する。各対象者の観察期間は、介入開始を起点として1ヶ月とし、1ヶ月(4週間)経過した時点で、観察終了として、終了時の情報を収集する。

<調査スケジュール>



副作用への介入開始日に登録し、介入終了までデータ収集を継続。  
新規登録終了日から1カ月で打ち切り

<主要評価項目と副次評価項目>

主要評価項目：認定薬剤師の副作用への介入後の効果（副作用別改善率）

副次評価項目：認定薬剤師の副作用への介入頻度、介入状況、認定薬剤師の治療へ貢献した自信度